

## 第8回統一思想国際シンポジウム

6月24-25日、日本、神奈川

### 「地球家族文明に向かって」

フレンシオ・マグシノ

#### I. 序文

先史時代において、人間は地球家族とか地球文明についてほとんど考えなかった。人間はただ生き延びていくだけで十分することがあったのである。だれも、人間がいつ地球的あるいは宇宙的な立場で考え始めたのか推し量ることができないが、そのような考えが人類歴史の様々な時期に中東、中国、アメリカ、インドにおいて、文明の発祥と共に現れたと推測することができる。それぞれの、発展する、文明化された社会が、貪欲さと自己利益から、自らの文化を、より劣等な文化とみなすところのものに押し付けようとし、また、彼らが受益者と考える者たちを犠牲にして、一層の繁栄と権力と支配とを自らのために獲得しようとさえしたのである。人類の歴史はそのようなものであったのである。

地球的思考への衝動は、最近、20世紀になってようやく現れたばかりであり、急速に進む人口増加と減少する世界の資源にかんがみ、人間は自らとその環境を評価しなければならぬという自覚に伴って、相当拡張してきた。

科学者や心理学者、社会学者により執り行なわれたねずみのような下等な動物における実験が明確に示したところによれば、限られた領域において増加しつつある人々やがて秩序と行動の崩壊に苦しみ、それはやがて混乱と無政府状態を生むであろうことを明確に示した。その教訓はきわめて強烈である。暴力、不道德、貪欲、サディズムといった行動は世界のスラム地帯において非常に顕著に現れてきた。この世界に広まるのを許すべきではない。そのような惨禍を防ぐために措置が講じられなければならない。各国は、人類のスムーズで、調和的で、統一された方向に向けて努力を向け直すべく、哲学、文化、運動に関して一致しなければならない。

従って、この統一思想国際シンポジウムは、その分散されない注意の焦点として、「地球家族文明の構築」という非常に適切なメインテーマを正しく選んだ。そのような目的をスムーズにしかも効果的に達成するために、この論文は以下に論じられた様々な題目に関する基盤と示唆を謙遜に提示するものである。

#### II. 宗教間の調和

ジェームズ・カース (James Carse) によって書かれたフィ・カップ・フィの刊行物『ナショナル・フォーラム』の1994年冬季号において「世界の宗教の多様性」と題する論文は、特に主宗教を結び付けることの難しさを扱っている。それは、「我々は信仰に基づいてある宗教を他の宗教から区別することはできない。実際、多くの学術的で盛んな試みにもかかわらず、すべての宗教を比べることができる共通の要素というものはないのである。その結果は、諸宗教間の当惑させるような距離と複雑さなのである」と結んでいる。

「このことは2つの理由で記憶しておくべき、重要なことなのである。第1に、非常に多くの文化はもともと土着の宗教的伝統によって形成され、しばしば、我々は、ある文化それ自体の宗教あるいは諸宗教が他のすべての宗教と異なっている、そのあり方について精通するまでは、その文化を理解することはできない。多くのアジアの文化、特に中国、日本、韓国の文化は、西洋におけるどんな文化にも似ていないばかりでなく、たがいに鮮明に違っている3つの宗教—道教、仏教、儒教になじみのない人を当惑させ続けるだろう」。

「2番目に、今日、世界には、宗教的相違をその核心において持っている多くの紛争が存在している。それらの紛争を解決する試みは、それぞれの対立する側が相手の宗教をいかに誤解しているかということについての啓蒙された理解を必要とする。そのような解決策が実施される単純な原理はない—それが「学習した無知」と呼びうるようなものでない限り。つまり、他の宗教は、我々がその伝統の中で広範に訓練されていないならば、それを理解することはできないという「明確な認識」である。我々がそのように訓練されていないならば、疑わしいままであることが思慮深いことである。疑わしいままであるというのは、他の宗教の教えや実践についてではなく、それらの教えや実践に対する我々自身の理解について、ということである」。

私はこの著者よりも突っ込む傾向がある。諸宗教の調和は可能であり、さらに加速されることは可能である。それらの一致はまだ遠い先のことではあるが、和合と紛争の回避は楽観的に前進していると見られるし、勢いは実は急がせることができる。エキュメニズムは非常に好ましく広まりつつある。異なる宗教の指導者は、温かく互いに挨拶をするだけでなく、また様々な活動や彼ら同士の対話においても共動している。異なる宗教から指導者が参加して開かれる会議やセミナーを通しての宗教の和合における統一運動の活動は、非常に励ましとなるものがある。彼らは、自分たちが同じ神を礼拝し、同じ神から出てきており、世界平和、真実の愛、またそれぞれの群れの間の幸福をもたらすという共通の使命を持っているのである。特にここで関係があるのは、アンドルー・ウイルソンによってまとめられ、編纂された『世界経典』と題する869ページの本である。この本は、人間の存在目的、悪、罪、人間の墮落、救い、宗教的生活、摂理、社会と天国のような題目に

関してそれぞれの宗教の主だった指導者による解釈を提示している。

この『世界経典』の本は、これらすべての宗教の間の一体を示唆する類似点を浮き彫りにしている。したがって、ここで必要なことは、宗教指導者間のよりいっそう活発な対話であり、それはやがてウイルソン博士自身によって支持されているように、「諸宗教の統一された世界」を生じさせることができる。その様な運動における主だった宗教指導者の団結は国ぐにの運命に影響を及ぼす上で強力な力になりうるし、その存在の動機にもなりうる——つまり、世界平和、すべての宗教・哲学・科学・人種・国ぐに・文化間の和合を達成しようとする動機である。

### Ⅲ. 男と女の調和

男と女は、本質的に子供を育て、家族を育てることを生じさせる性的活動から生ずるところの、人間の活動における際だった違いと役割を持つ。それで、性的器官において、また外形と生理において、また、生計の役目において、相違点が存在している。悠久の昔から、この二分法とそれによる調和は維持されてきた。新興の女性の反乱および彼女らの間の個としての自覚はいくつかの要素によって醸成されてきた。それらの中には、男性による虐待的抑圧、家庭での機械的な雑用から女性を解放した技術的進歩、女性の能力を高める自由な教育、そして最後に夫婦が共に一緒にお金を稼ぐことによる職歴に対する欲望とより高い収入といったものがある。これらの歓迎すべき動きの中にはなんら間違ったものはないが、女性運動は、絶対的な平等を説くことによって行き過ぎたり、性における不当な優越性を主張してはならない。むしろ、両性はそれぞれの役割と働きを悟るべきである。不満を持ち、妬みを持ち、また幾分異常なフェミニストたちによる熱狂的で、ヒステリックな示威行為において現されている過度の逸脱に陥りやすい人々をただ受け入れてあげるべきであろう。さらに良いのは、統一運動の第二祝福の目的は、国民的な精神においてより大きい役割を果たすべきである。そこ〔第二祝福〕においては男性と女性は神と、またお互い同士と、そしてまた他人と、また万物との間の真実の愛の永遠の誓いを行うことにより、家庭の調和を成就するのである。

### Ⅳ. 宗教と科学との調和

幸いなことに、宗教と科学とは今世紀に入って収斂に到達しつつある。様々な宗教、特にローマ・カトリック教会は、2世紀に迫害されたキリスト教科学者たちの名誉回復に見られるように、カトリック教会の信条と教義を、科学的な発見と実在と調和させている。他方、指導的な科学者は宗教的な仮説や理論、教義を受け入れてきており、宇宙のアルファでありオメガとしての全知、遍在で、全能な万有原力あるいは神、あるいは第一原因の存在を受け入れている。宗教は一般に、かれらの信仰と信条を、直観的な力、神の啓示、理性的な分析や解釈、また研究から、大抵推論や演繹法によって引き出している。他方、

科学は、大体、帰納法に基づいているのだが、論理的および理性的証明を満足させる実験や調査、発見に依存する。歴史は、そのどちらも多くのことにおいて正しいが、また幾つかの事柄においては間違っていることを示した。従って、一方が他方を攻撃したり、中傷したりする必要はなく、お互いがある研究を続け、それぞれの発見を強化するようにする必要があるのである。我々が知っていることに関する限り、両方が正しいが、イソップ物語の象を描写しているめくらの人達のようなものにすぎないからである。この論評は、哲学界において水からの発見や解釈を押し付けようとしている様ざまな哲学者たちにも向けることができる。

#### V. 資本主義と社会主義を超えて

人類の歴史の初めにおいて人間は、他の動物が今日までしていると同じように、自分と自分の家族のために食物や他の基本的な必需品を産出することによってその生き残りのために備えた。しかし、神は人間に理性的な心、人間の心、本心、また特に人間に付与された心——それは人間に、知性と感情と人間を他の動物よりも教段を高める自由意思とを与えた——を与えた。神はまた、人間に万物を主管する権能をも与えた。神は本心と心積の内的な賜物ばかりでなく、彼をして足で立ち、従って、腕を自由にさせ、その基本的な必需品をより良く、しかもたくさんつかめる能力を促進させる外的な賜物をも与えた。人間は他の動物が行いえない物事を作り、行い、それにより、万物を主管する能力を与えられたのである。

経済発展の「はしご」を登っていくにつれ、人間は拾い狩猟する段階から植物を養い動物を家畜化する段階へと向かった。後者の段階では、個々の家族が、士族、部族、共同体、小さな王国や国家、大きな国家、そしてついに大きな地域と人口を擁する帝国へと政治的に成長していったのである。経済的には、人間の成長は移動的段階から土地所有の段階へと発展した。それは封土から民族国家へと変貌したが、それぞれは物資をその間で交易していた。人間の経済的活動の状態はこのようなものであったが、それもやがて、技術の進歩が発明と発見により大きな飛躍をなすとげ、それが、さらに人間の生産力を増大せしめ、特に大量生産によってそうなり、それは資本主義の台頭を先導したのである。しかし、資本主義は、資本を提供しているものと、物資を作っている被雇用労働者との間の富の分配において深刻な不均等を生み出した——特に産業革命の到来時に、その結果生じた悲しい状況は社会主義とその過激な所産、共産主義という所産（マルクス—レーニン—スターリン主義）を生じさせた。そこにおいては、生産要素は、個人によってではなく、国家によって、提供され、所有されるべきものであって、どちらの体制においても、善良な意志は存在していた——つまり、利益を生みだし、雇用を与え、需要を満足させ、政府を支援する——しかし、どんな人間の活動においても、逸脱はつきまとった。それは大抵、人間の食欲と利己心と悪なる心から生じていた。利己的な人がいるように、また、万人の福祉と

正しく均衡の取れた体制を達成し、不平等、抑圧、悲惨を正そうとする、没我的で、情け深く、賢明な人がいる。こうして、様々な治療策が試みられた—政府による生産手段の所有と政府による経済の管理—マルクス主義の要求が実際に修正資本主義によって採用されたのである。それで、共産主義諸国におけるマルクス—レーニン—スターリン主義の崩壊に引き続き、中国やベトナムにおいてみられるように、国際的な市場の力を強く支持しながら、資本主義の採用はスムーズに導入され実施された。人間の出来事の圧力は、創造性や生産性、平等、公正を推進するために、国家を資本主義と社会主義の両方の有益な原理を飲み込み、保持させた。世界の指導者—彼らの高尚な政治的手腕は祝福されるべきである—は、ついに長く求められていた解決策にたどり着いた。これが「貿易と関税に関する一般協定」(GATT)という解決策であり、これは貿易障壁をなくし、国家をしてその天然資源や国力、可能性に焦点を向けさせ、貪欲や重労働、腐敗、非効率、困難、紛争から方向を転換させることとなる。こうした解決策が発見され、合意され、実施のために実行に移された。今や必要なことは、各国家がこの地球的な経済の現実に対する完全な支持の準備をし、成長の機関車としての民間企業の活発な利用を確保することである。それぞれが時々、管理経済措置として干渉してもよいが、それもただその経済の成果の平等な分配を確保するためにのみそうするのである。

#### IV. 唯物論的な思考方法の克服

人間は生き残りのための基本的手段としての本有的な獲得本能をもって生まれてきている。家庭生活、学校、宗教、行政法、組織規則、およびメディアは、社会の調和が果たされることできるように、この本能をコントロールし、修正しようとする手段なのである。もちろん、我々は、様々な要因のために、貪欲さと利己心は人々の間に行き渡っていることに気が付いている。善良な人々自身でさえ、無法な人々に対する防備として物質的な考え方を採用するように引き寄せられる。それで、唯物論的な考え方は伸長しており、それは、報道機関(新聞)、ラジオ、テレビ、映画および広告代理店が物質主義を醸成してきた陰險なやり方により、一層悪化してきている。唯物論に対して、民主主義的、および専制的な国家における宗教、政府および民間の指導者による敬神と道徳的な正しさへの呼び掛けは、大概、効果がなかった。それは、制定された措置が概して貧弱な実施しかされなかったり、中途半端にしか実施されなかったためばかりでなく、指導者自身が偽善者と感じ止められたり、自ら違反者であることがわかったりしたからである。

すべての宗教は特に真の愛とか善とか利己心をなくすこととかを教えるが、そこにおいて、人の思考や言葉や行動は自己を犠牲にして、より他人のためのものである。すべては、人の地上における行動は霊界における自らの位置を決定することを強調している。まだ地上にいる間の「カルマ」や煉獄や死後の地獄の脅威にもかかわらず、人はこれらの勧告によっても思いとどめられなかったのである。従って、必要とされているものは、それらの

勧告を精力的に押し進め、それらを広め、他の宗教をしてその教えを強化させ、善良であるということ、利己心をなくすること、また真の愛を実践することがとほうもなく報われることであるということを示す、そのような運動なのである。統一運動は、これらすべてのことを行っており、従って、そのメンバーによる完全な維持、また国家の指導者による採用に値するのである。「真の愛と知識以外には何も死後の世界には持って行くことができない」というスローガンは広くかつ精力的に広められるべきものである。

#### IV. 宗教と政治の調和

宗教と政治との関係の歴史は……されたものであった。政治的な単位はいずれの時に政治的あるいは宗教的指導者で、時に自ら神ご自身と見なされた者によって指導された。神政制国家——国王の神権のもとで、あるいは神・王によって、治められた国家——が時々現れてきた。しかし、大半の国家はやがて宗教を政治から切り離してきた。もともと、ある宗教の中には、イランにおいて例示されているように、宗教的支配を政治的統治の上にすえようとする試みがなお存在する。イスラム教ファンダメンタリズム（原理主義）はアルジェリア、エジプト、インドネシア、マレーシア、フィリピンおよび多くの中東諸国においてトラブルを引き起こしている。宗教的根本主義はもちろん、インド、パキスタン、中国、アイルランドにおいて盛んに行われている。世界的なイスラム教原理主義のテロを例外とすれば、宗教と政治は国家の憲法上の過程に従って、調和的に生きるように観念しているように見えるが、カトリックのフィリピンやイスラム教のインドネシア、仏教のタイなどのように、時どき、所どころで刺激源や侵略が発生している。それぞれの国は、フィリピンやヨーロッパ諸国のスペイン時代のように、行政問題への宗教の侵害の歴史を持っているが、一方、特に共産主義諸国における宗教迫害もまた見られた。貪欲さと利己心と無法とが宗教と政治を指導する人々に浸透している——そこにおいて彼らはそれぞれの組織と集団のために、富と権力と支配と影響力を求めて互いに張り合う——限り、宗教と政治との調和は不平の声や紛争をこうむるだろう。

ここで解決策は、またもや、統一運動のような組織がその真の愛の福音を広め、その信奉者たちの間に効果的に範を垂れ、それによって、宗教と政治の調和を求める大衆の要求を満足させるために、宗教と政治の両指導者に対して圧力をかけるように、その（統一運動の）教えを広範に広めるといふ、その（統一運動の）使命に成功することである。

#### VII. 世界政府

地球的政府という夢は実際、実現に近づいている。哲学者、政治学者、および他の夢想家たちは悠久の昔から、統一世界家族を思い描いてきたし、世界のユートピアを成し遂げる方法について考えや観点を発想してきた。人間は人間なりのつまずきながらではあるが、なんとかこの可能性に近づきつつある。こうして、ローマ帝国、中国帝国、大英

帝国のような帝国は大抵、征服と流血という過程を通して世界の舞台に飛び出した。その後の数年間に、我々は既存の民族国家の間の相互協定により国際連盟と国際連合の設立を見るのである。さて、我々はさらに、最初、政治的あるいは議会の協調を目的とながら、経済の分野における地域連合（例、欧州連合）の伸長を見ているのである。GATTやその結果生じる経済的恩恵がいかにかに世界の国々にをして、より開かれた旅や人間の交渉へと開かしめるのかを見ていこうではないか。そのような旅や人間の交渉は国境をなくし、やがて一つの国家世界を生じさせるだろう。

## IX. 結論

共通の文化的文明を持つ地球家族は、世界の事象が展開していくにつれて、遠く離れたことではない。善の精神は **なん** しか 一見この世界を包み込んでいる圧倒的な問題にもかかわらず、悪の雲を 克服する上で力を獲得しつつある。世界の統一の時代が21世紀に見られるだろうという多くの歴史家たちの夢は、実現しそうにあるように見える。

この世界のすべての人々が韓国のレバレンド・ソンミョン・ムーンによって心に抱かれ、組織され、広められている統一原理について学び、それを理解し、それを信じ、心から受け入れるようにさせることにより、このこと（夢の実現）は速めることができる。